

教育シンポジウム 2020



主催：徳島大学理工学部・工学部FD委員会

教育シンポジウム2020

共催：徳島大学理工学部FD委員会・工学部FD委員会

【プログラム】

1. 地域住民との連携による実践的教育

社会基盤デザインコース/建設工学科 尾野 薫

2. プロジェクトマネジメント基礎におけるルーブリック個人評価の実施と効果

機械科学コース/機械工学科 日下 一也

3. 学生実験におけるモチベーションアップについて

応用化学システムコース/化学応用工学科 鈴木 良尚

4. 電気電子システムコース講義科目（論理回路）におけるeラーニングの利用

電気電子システムコース/電気電子工学科 四柳 浩之

5. システム設計および実験（3年次実験科目）に対する取り組み

情報光システムコース情報系/知能情報工学科 永田 裕一

6. 光関連人材育成強化に向けた光情報教育システムの導入

情報光システムコース光系/光応用工学科 柳谷 伸一郎

7. 理工学基礎教育におけるWolfram Alphaの導入

応用理数コース数理科学系/工学基礎教育センター 大山 陽介

8. 応用理数コース自然科学系の学生実験における取り組み

応用理数コース自然科学系 山本 孝

9. イノベーション教育から生まれた大学発ベンチャーの事例

高等教育研究センター学修支援部門創新教育推進班 油井 毅

10. 海外留学への第一歩, Study Abroad First-Step Program in Malaysia 2019

国際連携教育開発センター 安澤 幹人

1. 地域住民との連携による実践的教育

社会基盤デザインコース/建設工学科 尾野 薫

講演要旨

(1)取り組みの背景

人々の暮らしを支える社会基盤は、地域住民が日々利用する街路や公園等の計画・設計や、森林・海岸・河川等の環境保全・維持管理、災害から人命を守るための防災施設整備等、スケールも内容も多岐に渡り、計画・設計・施工・維持管理に至るまで長期に渡って関わり続けることが常である。そのため、実務においてはプロジェクト全体のうち、ごく限られた一時期にしか関わることができないことが多く、「このプロジェクトが地域社会にどのような影響を与えるのか」ということまで考える余地もなく携わる実務者の姿を幾度となく目にしてきた。地域住民の暮らしをよりよいものにするためには、計画・設計・施工・維持管理に関わる技術者として、「地域住民がどう考えているのか?」という地域住民の声を聞き、実際に地域住民と連携しながら、地域住民とともに考える姿勢を身につけることが必要であり、そのためには、実際に利用する地域住民の姿を自ら想像し、解決策を想像する能力を養う実践的教育を行うことが重要であると考えた。

(2)地域住民との連携による実践的教育

本コースでは、1年前期「STEM 演習」だけではなく、3年前期「社会基盤実験実習」及び3年後期「プロジェクト演習」にて実践的教育を実施している。「土木技術者として地域貢献をするために必要な心構え、方法、ルール、配慮、技術を学び、実践を通じて地域課題に向かい合う経験を通して、地域社会・環境をマネジメントする視点を持ち、魅力ある地域活性化プロジェクトを自ら創り、実践する」ことを目標として、各教員がこれまで構築してきた地域住民との連携体制の中で、学生自身が発見した地域課題に関する調査・活動を行う。そのため、学生には自主的かつ積極的な取り組み姿勢が求められている。地域住民と対話をする中で課題を発見し、地域住民とともに調査・活動を実施する中で、地域の暮らしの中で培われてきた技術や知識を学ぶとともに、「地域の課題」に対して大学生が自ら解決策を提案し、実行している。これにより、「誰のために」「何ができるのか」という想像を促すことができ、自分たちの活動が人々の暮らしを支える社会基盤として地域貢献に繋がっているのか、実感とともに学生の学びとなることを目指している。



Fig. 1 地域における地域住民との連携による実践的教育の様子
(左：3年前期 社会基盤実験実習，右：3年後期 プロジェクト演習)

2. プロジェクトマネジメント基礎におけるルーブリック個人評価の実施と効果

機械科学コース ○日下 一也, 社会基盤デザインコース 金井 純子,
電気電子システムコース 芥川 正武, 応用科学システムコース 村井 啓一郎,
情報光システムコース 寺田 賢治, 高等教育研究センター 森口茉莉亜

平成 25 年度から開講しているプロジェクトマネジメント基礎は、理工学部 理工学科 情報光システムコース光系を除く全コース 2 年生対象の選択 2 単位の科目である。本年度は、昼間コース 161 名（社会基盤 7 名、機械科学 61 名、応用化学 29 名、電気電子 51 名、情報光 13 名、応用理数 0 名）および夜間主コース 16 名（社会基盤 2 名、機械科学 7 名、応用化学 3 名、電気電子 4 名、情報光 0 名）の計 177 名が受講した。8~10 名のチームを編成し、企業が抱える課題を解決するための企画設計を通してプロジェクトマネジメント能力を養う。本年度のテーマは、四国放送から提供いただいた課題である“若者のラジオ聴取離れ”を基に「災害時に不可欠なラジオを大学生が日常的に活用する企画を考える」に設定した。大学生必需品のモバイルバッテリーにラジオの機能を組み込む提案、イヤホン型の超小型ラジオ、洋服にラジオを組み込む提案などの斬新なラジオの開発を手掛けるチーム、小遣い稼ぎができる番組やスマホを連動して視覚的にも楽しめる斬新なラジオ番組を考えるチーム、ラジオを使った大学の講義などラジオを活用するシステムを考えるチームなど様々なアイデアが提案された。最終報告会には四国放送ラジオ局次長の中津氏にも出席いただき、学生の斬新な提案に今後の参考になると喜んでいただくことができた。

8~10 名のチーム作業の中で個人評価の手法を試行錯誤で実施してきた。昨年度まではプロジェクトノートを用意し、そこに記された個人の活動内容や業績を分析して評価していた。200 名近い人数を正確に評価するのは非常に骨の折れる作業であった。今年度は SIH 道場で学んだルーブリック評価法を取り入れ、Fig.1 に示すルーブリック評価シートを作成して事前に学生に提示した。その結果、前年度よりも評価しやすいプロジェクトノートが提出され、個人評価の手間が大幅に解消することができた。ところが、ルーブリック評価を意識してプロジェクトノートを準備できているチームとそうでないチームがあり、提出された資料の質および量で成績に大きな差が生まれた。全学生がルーブリック評価を受けることに慣れ、評価資料を準備することができるようになれば、教員の成績評価の労力がより低減されると期待できる。

ルーブリック評価(第 8~12 週)

評価日	1月1日		評価者	日下 一也	
班	1				
個人学生名	徳島太郎				

項目	量	評点			
		A(3点)	B(2点)	C(1点)	D(0点)
会議	1	○			
振り返り	1		○		
貢献度	1	○			
提案	1				○
司会	1	○			
議事録作成	1				○
PJノート作成	1				○

Fig.1 Rubric evaluation sheet

3. 学生実験におけるモチベーションアップについて

応用化学システムコース 鈴木 良尚

講演要旨

応用化学システムコース 3 年生対象の「応用化学コース実験 1」では、化学分野における重要な現象等の基礎的な実験技術の習得と実験を通じた理論的背景の理解の深化を目指している。

しかし、特に物理化学分野では実験内容がシンプルになる傾向がある。例えば部分モル体積の実験であれば、深い意義を理解しないで実験を始めると、実験の時間は「溶液の質量を測るだけ」という実験操作のみになり、それによってさらに実験の意義等を深く理解しようというポジティブなモチベーションを作り出すのが難しくなるという負のスパイラルに陥ってしまう。

もし、実験を始める前にポジティブなモチベーションを持てるきっかけを作り出すことができれば、実験の意義をできる限り深く理解しようという気持ちになり、それによって実験操作上で注意すべき点等をあらかじめ考えられるようになり、結果としていい実験結果に結びつき、といったスパイラルアップを図れるはずである。

そこで、担当実験である「結晶成長（ミョウバンの結晶化・結晶評価）」において、コンテストを実施してみた。評価は結晶の大きさ、単結晶性、透明度、芸術性など、こちらの独断と偏見で、しかしながら、公正に数値化した値を使って行ってみた。ポイントとして、少し思い切った試みとしては、コンテスト結果上位の学生には点数が与えられるシステムを導入した点があげられる。その結果、こちらの期待をはるかに上回る食いつきがあり、正直驚いた。

おそらく、ゴールが単純明快な点と、頑張ればそれが成績として返ってくるという魅力がポジティブなモチベーションを与えたと思われる。また、原料として使えるカリウムミョウバン ($\text{KAl}(\text{SO}_4)_2 \cdot 12\text{H}_2\text{O}$) の質量を 1g 以内としたり、使える温度条件について制限があったり、夜中、結晶の様子を見られない時間帯があったり、などなど、様々な制約が与えられる中、ベストなプロセスを個人個人で考えねばならず、自然と実験内容を詳細に検討せざるを得ない状況に追い込まれる点が、うまく作用したのではないかと思われる。



Fig. 1. コンテスト結果の掲示例

4. 電気電子システムコース講義科目(論理回路)におけるeラーニングの利用

電気電子システムコース/電気電子工学科 四柳 浩之

講演要旨

自学自習を促すしくみとして、電気電子システムコースにおいてもeラーニングを導入した科目が開講されている。本講演では、その一つとして担当の「論理回路」(2年生, 選択科目, 2単位)についての導入事例を紹介する。

本科目では、eラーニングシステムとしてmoodleを用いて、講義資料の配布、小テストの実施、補講時間の日程調整などを行なっている。小テストのいくつかについては、反復学習が可能な問題セットを作成している。Fig.1のように、アクセスごとに問題や選択肢が変わる問題を用意し、学生には繰り返し小テストの受験が可能で、最高点を採点時に使用すると伝えている。今回、小テストの実施記録から学生の受験状況を調査した。Fig.2に、今年度実施した9回の小テストにおいて学生が何回受験したかの分布を表している。

複数受験した回数は全体の約1/4であり、1回目に完答したものを外すと、誤答したうちの約1/3は繰り返し小テストを受験している。多数回受験している者も一定数あり、反復学習が活用されていることが認められる。ただし、すべての小テストを完答まで繰り返し受験した学生はごく少数であり、課題について修得できぬまま終わっている学生の対応について課題があるといえる。

今後、さらに反復学習用の小テストを事前学習用に用いてアクティブ・ラーニングへ応用することなどを検討してゆきたい。

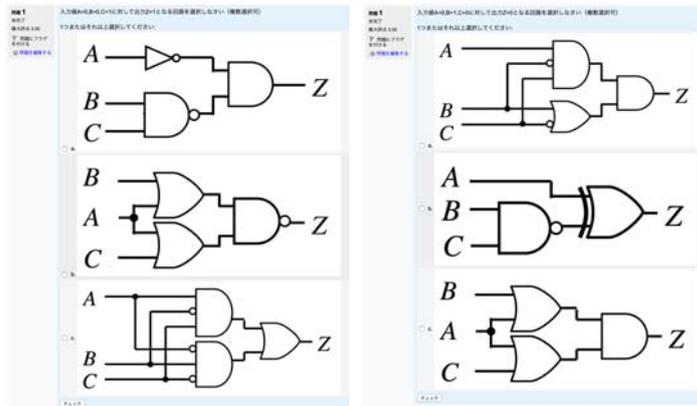


Fig. 1 反復学習用の問題例

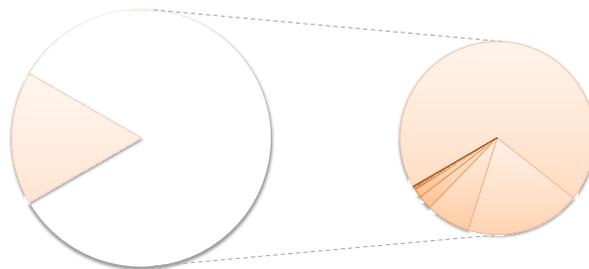


Fig. 2 小テストの反復受験回数の分布

5. システム設計および実験(3年次実験科目)に対する取り組み

情報光システムコース情報系/知能情報工学科 永田 裕一

講演要旨

情報光システムコース情報系では3年次の実験実習科目(必修, 通年)として「システム設計および実験」(以降, システム実験)という科目を開講している. 本科目は情報光システムコース情報系/知能情報工学科の目玉科目の1つとして, 長年にわたり改良が加えられてきた. 平成27年度からは実験内容を一新し, Arduino マイコンおよびZumo ロボット (Fig. 1) を使用した実験に内容を一新した. 本講演ではこれらの取り組みについて紹介し, 今後の展望について考察する.

システム実験の前期では, Zumo ロボットは使用せず, Arduino を用いた実験を行う. 基本的な実験内容は, ブレッドボード上に電子部品は配置して Arduino で動作させることから始まり, カラーセンサや超音波センサなどのセンサ情報を読みとって信号処理を行うなどの実習を通して, Arduino の基本的な使用法を学ぶ. 後期になると Zumo ロボットを用いた実習へと移行する. 後期の前半では Zumo ロボットを用いた基本的な制御法などを学び, 後期の後半では最終コンテスト (Fig. 2) に向けての開発を行う.

限られた時間の中で効率よく実験を進めるために, これまで取り組んできた主な工夫を以下に箇条する. 本講演ではこれらの工夫を中心に実験内容を紹介し, 今後の展望を議論したい.

- 正味の実験時間が長くとれるよう, テキストは事前に予習してくることを前提に毎回の実験を行う. 確実に予習してくるよう, 実験の冒頭に実験内容に関する小テストを行う.
- 実験内容および実験の進め方は落ちこぼれをつくらないことを第一として構成している. しかし, 優秀な生徒が退屈しないよう, 発展課題を設けるなどして工夫している.
- 後期はグループ単位の開発となるが, グループ内でやる人とやらない人ができる問題があった. この問題に対処するために, 個人単位で開発を進めなければならないようなコンテスト内容にしている. ただし, グループ内での協力も必要となるようにバランスを取っている.
- 後期のグループ単位の開発では事前ミーティングを導入している. これまでは, 実験中にミーティングを行っていたが, 本年度から manaba の機能を利用して, 実験時間外に電子ミーティングを行うようにした. 実験冒頭にもミーティングを行うが, 内容確認程度にとどめる.

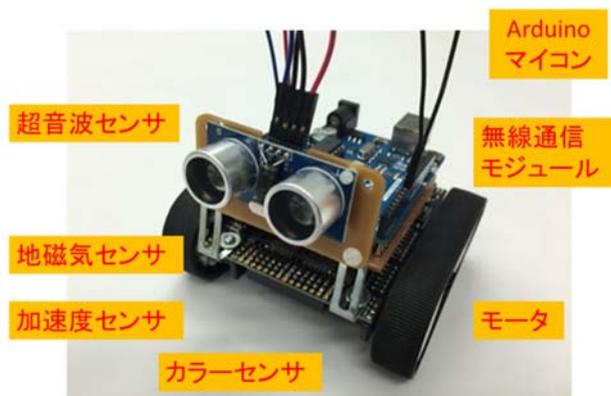


Fig.1 Arduino を装着した Zumo ロボット



Fig. 2 最終コンテストの様子

6. 光関連人材育成強化に向けた光情報教育システムの導入

情報光システムコース光系/光応用工学科 柳谷伸一郎

講演要旨

平成 30 年に採択された地方大学・地域産業創生事業の中で、大学院改革による光人材育成の強化が一つの柱として出され、関連して光応用棟に大学院での講義や地域産業連携のために使える光情報教育システムを導入しました。講演では、① 機器やソフトウェアの導入、② 講習会、③ 授業の事例紹介、④ これから使用を検討している方への使用ルール説明（主に物理シミュレーションについて）についてお話をさせていただきます。

導入した光情報教育システム

- ❑ サーバー（ログインサーバ及び COMSOL ライセンスサーバ）：1 台
- ❑ 計算機（20 台）：Core i7、メモリ 16GB、内 10 台グラフィックカード搭載（VR 用）
- ❑ VR システム（4 台）：VR ヘッドマウントディスプレイ（HMD、HTC VIVE）、VR ソフトウェア（OmegaSpace）
- ❑ 物理シミュレーションソフトウェア（COMSOL Multiphysics）：クラスキットライセンス（CKL、同時使用 30 台、教育用（研究用途不可）、フローティングネットワークライセンス（FNL、同時使用 1 台、研究用）
- ❑ セキュリティ：入退室管理

光棟計算機室 HP：<http://www2.optedu.tokushima-u.ac.jp/keisan/>



図 VR システム（左 3 枚）と物理シミュレーション（右 2 枚）の実習風景

7. 理工学基礎教育における Wolfram Alpha の導入

数理科学系/工学基礎教育センター 大山 陽介

講演要旨

PC が必携化になり、学生のほとんどがスマートフォンなどを所持するようになって、理工学部の数学教育も新しいツールをいかに講義に取り入れるか、さらに、学生の日常の学習に役立つツールを提供し、解説することも必要になってきている。

Mathematica, Maple など、強力な数式処理ソフトが昭和の終わりに登場しているが、高価なこともあって学生に十分普及しているとは言い難いし、また現場でも勧めにくい。現状では、フリーウェアを勧めることになる。有名なフリーウェアとしては、Macsyma 統計中心の R, MATLAB の互換ソフトである Octave などがあり、Python, Julia など普及しつつあるが、従来は Sage を勧めたりしていた。

スマートフォンでも簡単に使える、Web ベースの数式処理ツールとして、ここでは **Wolfram Alpha** (図 1) を紹介する。提供している Wolfram 社は、現在もっとも強力な数式処理ソフトの一つである Mathematica を開発・販売している。Wolfram Alpha もほぼ同じエンジンを用いているとみられ、Mathematica のコマン



図 1 Wolfram Alpha

ドはそのまま使える。

この Wolfram Alpha が優れている点は、画像のように日本語を入力しても、ある程度は対応してくれることである。工学基礎教育で担当する学生のほとんどは、数式処理特有のコマンドに慣れてない初心者なので、いい加減な命令でも結果を出してくれる Wolfram Alpha は使いやすい。また、工学基礎教育センターの担当科目である微分方程式、ラプラス変換、フーリエ変換、複素関数、ベクトル解析、確率統計などに対応したコマンドが使える、入力自由度が高い。数学の学習レベルの点からも、数式処理の初学者が使い始めるという点からも、ともに適切ではないかと考えている。

Wolfram Alpha の短所としては、まず、コマンドラインが 1 行なので複雑な計算を実行させられない。また、処理の時間に制限があるために、複雑な計算をさせたり、計算の途中を表示させたりしようとする有料の Pro 版を購入する必要がある (学生の場合、1 年契約で 6,600 円であり、月あたり 550 円である)。しかしながらコマンド 1 行の無料版でも工学基礎のレベルであれば、学生たちが問題演習補助として使う分には十分であろうと思われる。

シンポジウムでは、Wolfram Alpha を用いた工学基礎教育について簡単に話をする予定である。

8. 応用理数コース自然科学系の学生実験における取り組み

応用理数コース自然科学系 山本 孝

講演要旨

応用理数コース自然科学系は物理学・化学・地球科学・生物科学系の四分野から構成されている。実験・実習科目として分野ごとに基礎〇〇実験、〇〇実験1、〇〇実験2が(〇〇は物理学, 化学, 生命科学, 地球科学)を開講し、それぞれの専門分野の基礎知識と発展的な力を習得する授業科目を開講している。本講演では、それぞれの分野で行っている学生実験の概要および実施状況について紹介する。

基礎〇〇実験は中学校理科教員免許科目でもあり、四分野とも応用理数コースの幅広い学生が受講する入門的な実験である。本学理工学部の大学入試センター試験を課す一般入試において、理科の科目は物理および化学の二科目が指定されている。その結果、本コースの学生のなかで、生物および地球学に関し、高等学校理科の学習指導要領における「生物基礎」以上の内容を学習しているものはきわめて限られている。そのため、いずれの基礎実験でも各分野の興味・関心を引き出す授業が行われている。〇〇実験2では先行開講されている実験科目受講により修得した知識および技能のもと、各分野で卒業研究を行うために必要な実験技術や実験結果の解析能力を養うことを目的とした授業が行われている。四分野に分かれるために各実験の受講者数は最大でも10名以下である。そのためきめ細かな指導が可能であり、精密機器分析装置を用いた実習、野外実習等が実施されている。

地球科学基礎実験 (2年前期, 教職科目)

概要: 地球科学に関する入門的な実験。
中学校理科教員免許科目でもあり、応用理数コースの幅広い学生が受講する。

授業内容 (2020年度シラバス)

- 第1回: ルートマップ作成法(1) スケールと方位, 歩測, 位置情報の記載
- 第2回: ルートマップ作成法(2) 周回ルート測量と地質構造の記載
- 第3回: 画像の判読による地質構造解析
- 第4回: フィッシュトラック年代測定法1 ジルコンとアパタイトの同定・FIの観察
- 第5回: フィッシュトラック年代測定法2 FIの計数と年代の計算
- 第6回: 地震変形と地震の再来周期
- 第7回: 花崗岩のモード測定
- 第8回: 岩石・鉱物の化学組成に関する計算
- 第9回: 偏光顕微鏡による薄片観察: 火成岩1-深成岩
- 第10回: 偏光顕微鏡による薄片観察: 火成岩2-火山岩
- 第11回: 天気図の作成
- 第12回: 地形等高線・地形断面図
- 第13回: 地質図学1 露頭線の作図
- 第14回: 地質図学2 地質図と地質断面図
- 第15回: 地質図学3 断層・不整合

岩石薄片の観察



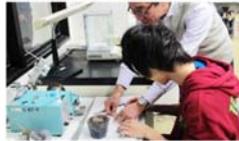
物理学実験2 - 3年後期

仮配属した研究グループで、卒業研究につながる実験やゼミを毎週行う。

- ・宇宙科学分野 - 放射線検出器の調整
- ・素粒子理論分野 - 量子力学ゼミ



- ・量子物性科学分野 - 超伝導体の作成
- ・固体イオニクス分野 - NMR実験



〇化学実験2 (3年生次前期オムニバス) X線分光実験

本分野には平成22年、共同利用機器として実験室系X線吸収分光装置が納入されている。本機は適切な管電圧および分光器の設定による特性X線を利用した蛍光X線スペクトルの測定が可能であり、X線回折/吸収/発光実習が可能である。

XAFS測定



測定試料



XRF測定



アサガオ

在来種・外来種および両者の雑種のアサガオをDNA分析で判別し、遺伝子解析の基礎を学びます。



カエル

カエルの人工授精を行います。受精した初期胚の外部・内部構造を観察し、発生学の基礎を学びます。

ショウジョウバエ

バナナトラップでショウジョウバエを捕まえ、ハエを使って遺伝学の基礎を学びます。

微生物

いろいろな微生物を培養し、菌の同定や酵素活性の測定を行い、微生物学、生化学の基礎を学びます。

9. イノベーション教育から生まれた大学発ベンチャーの事例

高等教育研究センター学修支援部門創新教育推進班 油井 毅

講演要旨

2019年11月18日、イノベーションチャレンジクラブの活動から徳島大学発ベンチャー「株式会社 KAI」（認定20社目）が設立された。同社は徳島大学の現役学生が社長と務める初めての株式会社であり、主に給餌装置および給餌システム、動物園用遊具、運動促進システムの開発・販売を行う。

イノベーションチャレンジクラブは、徳島にいながら東京や大阪などに本社機能を持つ企業のリアルな課題に対し、デザイン思考で解決を目指す活動である。ベンチャーマインド、リサーチマインドの醸成を目指したプログラム設計、さらに多様なメンバーでチームを形成することを念頭に2018年4月に課外活動としてスタートした。2019年4月から教養教育イノベーション科目として集中2単位の授業となり、2018年度同様、活動期間は4月～11月とした。2018年度参画企業はジェイテクト、パナソニックサイクルテック、ヤンマー、YKKの4社、2019年度は日本ハムが加わり5社であった。

2018年度、ジェイテクトから提供いただいた「ベアリングを活用した一般消費者向け製品とビジネスモデル」というテーマに学生たちが取り組んだことがきっかけで給餌装置の開発がスタートした。2018年11月活動終了後、さらに有志の学生メンバーでデザイン思考のプロセスを繰り返しながら2018年11月～2020年3月にはユーザー評価、全国の動物園の給餌装置の調査を行った。2019年4月に香川県東かがわ市のしろとり動物園でサル安全性等を確認するための実証実験を行い、5月、ジェイテクトと共同で特許を出願した。6月～7月、オツクルでクラウドファンディングを行い80万円の目標に対し86万円集まったことで活動資金を獲得するとともに一定の社会評価を得た。11月には前述の通り会社を設立。その後、Matching HUB Business Idea & Plan Competition という全国規模の学生ビジネスコンテストで最優秀賞を受賞するなど、これまで5つのコンテストで計7つの賞を受賞している。さらにマスコミにも多数取り上げられている。2019年12月19日にはしろとり動物園で実機を設置し運用を開始するなど着々と会社としての機能を果たしつつある。

これまで本学にも起業意欲の高い学生は多数存在していたはずであるが、どうして起業に至らなかったのかを研究する必要がある。一般的に、起業関心層がまだ起業していない理由は「自己資金が不足している」「失敗したときのリスクが大きい」「ビジネスのアイデアが思いつかない」が挙げられる（出典：日本政策金融公庫総合研究）。日本の起業活動が低い原因として「大企業との連携不足」も発表されている（出典：経済産業省「ベンチャー有識者会議とりまとめ」）。

本シンポジウムではこれら一般論の他にイノベーションチャレンジクラブの活動を通じて得た学生ベンチャー立ち上げの難しさについて述べる。



Fig. 1 しろとり動物園に設置した給餌装置

Fig. 2 2020年2月7日NHK放映

10. 海外留学への第一歩, Study Abroad First-Step Program in Malaysia 2019

国際連携教育センター 安澤 幹人

議事要旨

少子化、海外企業の国内進出、海外市場の拡大、情報・通信・輸送の国際ネットワークの高度化が進む現在においては、企業のグローバル展開が益々盛んになっており、コミュニケーション能力に加え、異文化を理解・対応が可能なグローバル人材が求められている。理工学部・先端技術科学研究部においては、これまでも学生の海外留学・海外インターンシップ派遣の支援により、グローバル人材育成に努めているが、平成30年度において海外留学派遣した学生数は30名程度と少ない。また、先端技術科学研究部のダブルディグリープログラムを15の学术交流協定校と実施しているが、留学生受入に比べ学生派遣は圧倒的に少なく、双方向のプログラムと言いにくい状況が続いている。一方、海外に行くことに関心のある学生は相当数あるように思われるが、本学で実施している海外派遣プログラムは、高額な語学留学が主であり、高い意欲・関心のある一部の学生に限定されている。そこで、学生の金銭的負担も少なく、夏休み期間を利用した一週間程度の短い海外派遣プログラムを企画すれば、学生のハードルも低く、多くの学生が参加でき、今後より長期の海外留学プログラム参加へのきっかけになるのではないかと思われる。理工学部と生物資源産業学部は共同で、平成27年度より毎年2月下旬からの約一週間、約10名の新生を本学のアカデミックセンター（TMAC）が設置されているマレーシアマラッカ技術大学（UTeM）に派遣し、レゴマインドストーム等を用いたPBL型授業や異文化体験を行うTMAC Design Workshopを開催している。そこでこのプログラムをベースに100名規模の派遣プログラムができないかと考え、国際センターと連携し、入学したばかりの全学部の新生を対象とした夏休み期間に行う短期海外派遣プログラム（令和元年8月24日～9月2日）を企画した。本プログラムは全学の学生が対象であることから、午前中は約4時間グループワーク・プレゼン・インタビュー等の英語授業を、午後からは博物館見学、アスレティック体験、マラッカ（世界遺産の街）の散策等、街に出て実際に英語を使う活動を計画した。徳島大学からは72名（理工新生54名）が参加した。UTeMからも22名の学生が参加し、本学学生とキャンパス内の寮に滞在、朝食から夕食まで全ての活動を一緒に行った。なお、費用は、交通費（徳島大学から往復バス代含）、授業料、滞在費、朝食・昼食費、保険料併せて約11万5千円となり、アスパイア奨学金の条件を満たす51名（理工38名）は5万円の支援を受けた。本プログラムでは、次の4つの目標を掲げた。①異文化を知り、自分の考え方や価値観、視野を広げよう。世界に目を向けよう。②英語を身につけ、実際に使ってみよう。③マレーシアの文化を体験し、日本の文化・自分自身の文化と同じところ、違うところを観察し、多様な社会・人間関係の中で生きる力をつけよう。④マレーシアの学生、徳大の参加学生と友達になり、コミュニケーション能力を伸ばそう。なお、「安心」「安全」のコンセプトから、事前指導3回、旅行保険会社による危機管理説明会等を行い、期間中は本学教員1名と添乗員2名（旅行会社派遣）が引率した。終了後に行ったアンケート（回答率97%）では、プログラムに対する評価は平均4.59（5段階評価）と高く、「今後さらに長い英語の留学をしたいと思いますか」という質問に89%の学生が4あるいは5をつけ、平均4.43（5段階評価）であった。自由記述にも「英語学習に対するモチベーションが上がり、もっとたくさんの人とスムーズに話したいと思うようになった」等があり、本プログラムに参加した多くの学生の英語学習や長期留学への関心や意欲を高めることに寄与したのではないかと思われる。

